慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウ井リアム・モリスの観たる中世経済生活（上）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.5 (1922. 5) ,p.678(98)- 688(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220501-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に『一國民が非常に貧弱であるか或は愚蒙であるので氣まぐれ以外の動機では働かず又眞面目な仕事に先づ手を着ける事が出來ないと云ふならば別に是等のまぐれ氣を非認する要はない。一國民が鐵を造る事が出來ないでラヴェンダアから香水を採る事丈けが好きだと云ふならば其の國民に出來る丈けラヴェンダアを與へるがいゝ。然し其の經濟論者をしてラヴェンダアは國民にとつて燕麥程有益なものであり其は貧者の生活の助けとなるものであると考へさせてはならない』(Ibid.)。

かくてラスキンは茲では嬌艶と恩惠とを混同し自己を欺いて吾々の纏ふ美衣は何づれも空腹を訴へる下層の者の口中に之れに相當する丈けのものを入れてやるのであると考へてはならないと注意を與へてゐるが (A Joy For Ever, §50.)、ラスキンは單に奢侈生活と恩惠との混同を非難する丈けには止まらない、彼は進んで是等の美衣は其れに相當する丈けのものが彼等の口中に入れられた事を示すのではなくて反對に其れ丈けのものが彼等の口中から取り去られた事を意味するのである」(同上) と說き貧困と富裕とがかくも甚しく隔絕するの社會生活に於いては奢侈は寧ろ罪惡であると主張してゐる。次に此の點に關して觀察してみやう。(未完)

ウヰリアム・モリスの觀たる中世經濟生活 (上)

加田哲二

一

藝術に對する好愛と歷史の研究の結果から社會主義者となつたウヰリアム・モリスは他の社會主義者と異つた中世紀觀の持主であつた。即ち、資本主義は社會主義と比較するときは、一の害惡である。けれども小規模產業と束縛を蒙つてゐた小規模生產者が官僚の慈悲によつて存在してゐた中世主義に比較すれば幸福である」とするニコライ・レーニンと立場を異にする、(New Policies of Soviet Russia, The Meaning of the Agricultural Tax, by N. Lenin. p. 37) 然るにモリスは、その暴行の行使と權威(オーソリティ)の否認を極力攻擊した無政府主義者のあるものと同じ立場にゐた。クロポトキンは云つてゐる。「中世都市を明かにするに從つて、吾々は益々、それが單純に或る種の政治的自由の保護を目的とする一政治組織に止まらなかつた事を知るのである。即ちそれは、共產村落に於けるよりも、より大きな規模の上に相互扶助と相互支持との爲めの、消費と生產との爲めの、さうして又全社會生活のための緊密な團結を組織して、しかも同時に人々の上に國家の桎梏を課する事なしに、藝術や、手工や、科學や、商業などに於ける個人の各團體と政治團體との創造的天禀に十分な表現の自由を與へうとする企てゞあつた」。(クロポトキン著大杉榮譯相互扶助論二六三—二六四)

中世都市を斯くの如くに解するクロポトキンの態度はまたモリスの態度であつた (クロポトキンの「相互扶助論」における中世紀論とモリスの觀方とが類似してゐることは、以上の引用並に以下のモリスの所論に照して明かである。モリスの中世紀觀はラスキンの研究によつて形成されたことは屢々他の機會において論じた。中世紀觀の發表に就いては、モリスの方がクロポトキンよりは少し早いやうである。即ちバックスとの共著「社會主義」は千八百九十三年の刊行である。然るにクロポトキンの相互扶助論が個

々の論文として雜誌「第十九世紀」に發表されたのは千八百九十年九月から千八百九十六年六月までの間である。さうして「中世都市の相互扶助」は千八百九十四年八月、九月の兩月號である。（大杉榮譯、相互扶助論一七頁）モリスは無政府主義には反對したが、クロポトキンの社會思想とは類似の點が多い。兩者間に個人的交渉はなかつたやうだが、兩者の思想の比較對照は甚だ面白さうである。他日機會を得てこのことを爲し得れば、自分の幸福と思ふ。）

モリスは自ら「不適當な時に生れた」と稱して近代主義者を以て、任じない程、それ程中世紀の好愛者であつた。けれどモリスはジョン・ラスキンのやうに保守的中世主義者を以て任じたのではない。彼は藝術の傳統と社會生活の精神とを過去に求めた。この中世紀における藝術の傳統と社會生活の精神から出發して、彼は新社會制度の理想――共產主義の理想に到達したのである。故にモリスにおける中世紀觀は彼の社會思想を形成する上において甚だ重要であつたと云はなければならない。

モリスの中世紀觀は、彼の友人で社會主義者であるベルフォート・バックスとモリスとが、社會の發達と社會主義との關係を歷史的に論述した「社會主義。その發達と成果」(Socialism, its Growth and Outcome. by Willia Morris and E. Belfort Bax. 1893) において最も組織的のものを發見し得る。（この書が眞の意味において共著なることは、その序文において兩者の明言するところである。）これに配するに千八百九十年十一月「タイムス」に表はれた一論「第十四世紀における藝術と產業」Art and Industry in the Fourteenth Century in Lectures on Art and Industry. Collected Works, Vol 22. pp.375 ――）を以てするならば、その大體を知ることを得るであらう。

二

モリスは、他の多くの社會思想家の如く、古代野蠻時代の社會狀態が氏族等の血族關係の團體にその基礎を置く共產社會であつたことを認める。さうして社會の進展と社會團體間の爭鬪の必然的結果として、奴隸が發生した。即ち征服者が被征服者の生命を助ける代償として被征服者は征服者の奴隸となつたことである。その第二の原因は爭鬪における捕虜が刺殺せられずして、生產的勞働に使用されたことである。この二つの原因から所謂動產奴隸 Chattel Slave なるものが發生し、これが血族團體の主長によつて所有せられることとなつた。社會各員間における權力の衡平は漸く破ぶらるるに至り、原始社會の原則であつた平和と財產の共有は破壞せらるに至つた。かくて生活限度以上の富の發生は、その分配の不平均と共に階級的社會を形成するまでに及んだのである。(Socialism. Chap.I. Kerr ed.)

原始野蠻時代から古代文明時代へ推移した社會の狀態はこの階級的社會の發生したときであつた。古代文明は都市生活の形態を以て表はれた。都市は共同生活の單位であり、崇拜の中心地であつた。都市を圍繞する土地は氏族民に對する食糧の供給所であつた。彼等の社會的並に宗教的殿堂は都市內にあつた。さうして都市の社會生活はその漸次の發展によつて、舊時の團體の獨立を破壞し、その團體員間の純個人的關係を死滅せしめることによつて、政治的生活を樹立した。

この變化と共に互に爭鬪しつゝある諸種族間における平和の確立に從つて徐々として市場の

發達が起り來つたのである。かくて市場は都市とその市民との保護の下に規則的な確定的の制度たるに至り、都市の權力並に重要を增加せしむる主要なる要素たるに至つた。さうしてこの市場の發達から起つた諸地方間の交通は諸都市間の聯盟を作らしめるに至つた。交通の發達は益々動產奴隸の數を增加し、一切の產業的勞働は奴隸の手によつて行はるるに至つて一氏族の自由民中で、富を蓄積したものから成る新しい貴族を發生せしめ、金權主義は漸く諸社會制度を支配し、すべての政治的並に社會的權利はその單純なる形態において消滅し、單に財產權に對する附隨物として現はれることになつたのである。かくの如き經過が、チグリス、ユーフラーツの兩流域。ナイル河畔、楊子江沿岸、並にガンヂス河の流れに沿ふて發生して文明の社會的內容であつた。(Socialism, Chap. II)

中世紀はこの文明の崩壞してから後に發生した時代である。然るに世の一部の史家は古代都市文明を以て直ちに近代生活の兩親であると主張し、さうして古代並に近代の間に狹まつた中世紀なる時代は單に混亂の時代に過ぎないと云ふ。然るにこの所謂「混亂の時代」はそれ自らの秩序を持つてゐた。そは原始的社會から近代的社會への進化の道程における必然的過程であると認めらるるに至つた。(Socialism, p. 43)けれども中世紀が如何にして古代から發達し、その社會狀態如何と云ふことを說明する前に。一應中世紀に關する種々の誤解に就いてモリスの說を聞くことはモリスの中世紀觀を簡明する上において極めて必要のことと信ずる。

三

ブルジョワ的歷史家は現代の讃美に忙しく、現代の平和と秩序と繁榮との讃美を力說するの餘り中世紀を以て單に劫掠と混亂の時代であるとしてゐる。勿論中世紀に於いては、他の諸時代におけるやうに粗野荒凉たる一面が存在した、けれども中世紀には眞の生命と進步とがその間に存したのである。吾々は今こゝに中世紀の美しい一面を觀過し、さうしてその粗野荒凉なる一面について、その性質を研究して見たいと思ふ。

中世紀に於る生活の不如意に關しては、主として三つの原因があると思はれる。その第一が生活の粗野と物質的享樂の缺乏である。その第二は生活における强壓と暴行とである。その第三は無智と迷信とである。第一の生活の粗野と云ふ事に關しては吾々は次のやうに考へる事が出來る。吾々は吾々が以前に持つてゐない享樂、もしくは考へることも出來ないやうな享樂の缺乏に困難することがない。例へば現代において吾々は飛行することが急行列車に乘るよりは愉快のことだらうと考へるこるが出來る。けれども吾々が飛行し得ないと云ふ事實は吾々を不幸たらしめない。人間の感覺は容易にその環境に應化して、少し位の不便は、これを不可避と考へる人々にとつては感ぜられないのである。この種の議論は、その不如意が、これを負擔する人々の墮落とならない場合において云ひ得る。然るに單なる生活の外形的粗野は墮落とはなり得ないのである。また次のやうなことも云ひ得る。即ち現代人が何等の準備なくして、中世的狀態に置かるることは、甚だしい脅威であらう。これと同樣に中世紀の人々が、現代ロンドン人の「享樂」を樂しむことは、よく爲し得ないであらう。また例へ中世紀に比較して、現代文明が優秀なものだと假定しても、その優秀な文明は現代人

のすべてによつて享樂されてはゐない。現代の不熟練勞働者の全部はその衣服において、その住宅において、その食物において、遙かに中世紀の同樣な階級の享樂してゐたものに劣つてゐる。このことは現代文明の讃美者に對する一大痛棒たらざるを得ない。

次に中世紀における無智と迷信とを觀察する。中世紀における無智は主として彼等の宇宙觀の素樸なことを意味する。彼等の無智は自ら撰擇した無智ではない。中世紀においては熱心な智識の追究があつた。また吾々に對しては迷信であるものも、彼等に對しては科學であつた。それは恰度物質の性質に關する現代の科學的說明が、科學の進步に從つて不充分なものとなつて來るのと同じ過程に過ぎない。アレキサンドリアの天文學者 Claudius Ptolemy の天動學說は當時の人心に滿足を與へてゐた。然るにコペルニクスの地動說はこれを打破したのである。これを以て直ちに、コペルニカスの地動說を完全無缺だと云ひ得るだらうか。第三に暴行と貧窮との問題がある。中世紀における貧窮の問題は、半ば當時における暴行の存在の結果であり半ば自然の資源の利用の充分でないことによつてゐる。けれども當時の貧窮は一時的のものであつて、現在の貧窮のやうに、資本主義制度に必然的に附隨してゐるものではない。第十九世紀のブルジョワ階級は中世紀の貧窮と掠奪と苦痛とに驚く。けれども彼等は現存の貧窮と掠奪と苦痛とを親ら經驗しない許りである。プロレタリア階級のみこれらの負擔に苦しんでゐる。然かも有產階級の富裕なる生活をその眼前に見ながら苦んでゐる。然るに中世紀にあつては貧窮と苦痛とを受くるものに、貴賤上下の區別が存じなかつた。薔薇戰爭の中に叫ばれたことは「領主を打て、平民を救へ」と云ふ聲であつた。

中世紀の人々は現在の人々に比較して、尙一つの精神的安心があつた。彼等は現代人程神經質ではなかつた。從つて彼等は現代人程の苦痛を感じなくて濟んだのである。それのみではない。中世紀の人々は深い信仰があつた。死は彼等に對して、彼等の生命の一時的中斷に過ぎなかつたのである。かく彼は生命の永遠性を信ずることによつて安心と慰安とを得たのであつた。

要すに中世紀における貧窮の存在は事實であるが、その本質は現代のそれと異つてゐた。換言すれば中世紀は民衆藝術の時代であつた。時代の生活は如何やうにもあれ、彼等は多くの美そのものを作つた。然らば民衆藝術の時代である中世紀は如何に發達し、その社會的生活はどうであつたか。（本項は前揭 Socialism, Chap. V. The Rough Side of Middle Ages pp 63 - 69 の大要）

四

古代の社會生活から中世の社會生活に推移するためには、二つの要素が必要であつた。その第一の要素は舊時の組織の內部的崩壞である。その第二は純粹な原始的野蠻的制度の發達である。これと共に倫理的並に宗敎的狀態も變化し、新しい倫理と宗敎とが中世紀の精神を形成し、更らに新しい藝術を生むに至つたのであつた。

經濟的方面から觀察すると、先づ生產における勞働狀態の變化である。即ち動產奴隸を基礎としてゐた古代の生產は中世に至つて隸農を基礎とする生產組織に移つた。古代における農業はその產業中の主要なものであるが、それは全然動產奴隸の勞働によつて行はれてゐた。ローマ帝國の盛時においては、この組織で何等の障

害なく進んで行くことが出來た。けれども帝國の國境が次第に縮小せられ、戰亂がその中央部において行はれ、さうして殘忍酷薄な官僚式徵稅法は、その資源を枯涸せしめ、その市場を衰微せしめ、人口を減少した。かくして動產奴隸の基礎は破壞されたのである。さうして繁榮も衰微も、戰爭も平和も善良な國王も暴虐な國王もこのローマの衰亡を救ふことは出來なかつた。たゞ富者の貧者の生活に對する責任感のみよくこのことを爲し得たであらう。然らば當時の貧產階級は何事を爲したか。ローマ人の大商業的資產である「ラチフンディヤ」Latifudia は、嘗て血族團體若しくは家長的家族の掌中にあつた農業を併呑した。然るに今や、古代の世界的市場の崩壞によつて、組織的奴隸の使用による土地の耕作は何等の利潤を齎さざるに至つた。奴隸所有者の爲すべきことは、奴隸の生存に關する責任から解除せらるることであつた。さうして奴隸をして、半ば獨立の農民として土地所有者に實物並に勞働によつて地代を納入せしめ、疎放的な非組織的な方法によつて土地を耕作することを許すことであつた。これが古代の奴隸から中世の隸農への道程である。これと同じやうな道程を取つて進んだものは、家庭用の奴隸と手工に從事するものとであつた。

中世紀の新社會制度に對する第二の要素は、ローマ帝國の末期に帝國へ侵入し來つた野蠻民族である。彼等は古代の思想と習慣と異る內容のそれらを持つてゐた許りでになく、彼等の習慣と思想とは、その本質において異つてゐた。彼等と雖も、動產奴隸を所有してゐた。けれどもその狀態は初期のローマの農場主の家庭的奴隸よりも、よりよい狀態にあつた。彼等は屢々主人の勞役に服してはゐたが解放された人であつた。この保護の代償として勞役を提供することは嘗てローマの思想ではあつたが、今尙ほ野蠻的種族の生活の主要な部分で、彼等はこれを古代社會の廢虛上に徐々として起らうとしてゐる社會に輸入したのであつた。

これらの經濟的變化と共に、倫理的並に宗敎的狀態が變化して來た。都市組織の瓦解は、都市崇拜の社會的宗敎を亡ぼした。さうして古代民族の祖先崇拜と自然物崇拜の宗敎はある形態において殘存してゐたが、その宗敎的特質が、失はれたのであつた。この人心の空虛を充たすために、一つの新しい宗敎が起つた。この人心の空虛を充たす必要のために起つた宗敎は個人的色彩の强いものであつた。そは個性を以て、ある超自然的のもので、宇宙最高の超自然力と神秘的關係を有することを力說した。かくてそは心靈神聖の宗敎を樹立した。この個人的宗敎は神秘的の形態を採つて表はれた。そは祖先崇拜または自然的崇拜から起つたものもあるが、今や全く新しく應用せられ、死後の靈の狀態に關する說と靈が窮極において神と一致すると云ふ說とにおいて表徵されてゐる。この宗敎的精神が基督敎に進展し來ると、その異敎的部分である排他的精神を除去し、さうして廣くその精神を民衆の間に廣めた。けれども基督敎もまた後に至つて聖なる生活にその身を献げる者とこの世にあつて、世俗的生活を送るものとの間に差別を立てることによつて、一度退けた排他的精神を復興せしめたのであるかくて排他的宗敎でなかつた基督敎は一般的の信認を博したこれには經濟的原因のなかつた譯ではない。奢侈を攻擊することを職業とした人々の手に蓄積せられた富は、多く貧者の生活維持に投ぜられて多大の宣傳的效果を收めたのであつた原始的基督敎

の勝利はかくて確保され來つたのである。

諸種の社會的變化は藝術における變化を生んだ。希臘諸民族の古代藝術は表現的、自然的、裝飾的であつた。希臘民族の如き多能多藝の民族の間にあつては、藝術は行き得る程度迄完全に達した　彼等の强烈な論理的の感覺は必然的に完全性における一定の限界を發見し、この限界以上に進むことを敢えてしなかつた。けれども民族の廢頽と共に、强烈な精神的勢力は消磨し、藝術は形式に捕はれて、その精神を沒却し、かくて基督教興隆以前において滅亡するに至つた。この廢虛の上に新藝術は興された。それは疑ひもなく東方との交通の影響を受けてゐる。それはユスチニヤン皇帝によつてコンスタンチノプルに建立された聖ソヒィヤの寺院にその代表的のものを見出すことが出來る。さうしてこの種の藝術は新社會の必要と理想と共に發達し、

たのであつた。

この重要な新時代の生活に對する要素即ちローマ文明の崩壞と進步的野蠻主義の透徹は四百六年におけるゴート民族の伊太利侵入に始まり、數世紀の戰亂を經て、諸異要素の融合し、渾然たる新社會の漸く形式さるるに至つたのは紀元八百年ローマにおいて戴冠式を行つたシャール大王の時代であつた。かくて古代社會は中世社會へ進展して行つたのである。（本項は、前揭 Socialism, Chap. III. The Transition from the Classical to the Medieaval Period. pp. 43-51. の大要）

（次號完結）

健康保險運動の基調（三）

園　乾　治

五

現在行はれてゐる健康保險のための諸制度は、單に醫療上幷びに財政上の救濟の要求に適應しないものであるのみならず、これ等の諸制度には元來固有の短所がある。そのために到底上述の要求に適應するやうに發達することも不可能であることは、從來の經驗の示すところである。以下少しく立入つて「現在行はれてゐる諸制度は要求に適應することが出來ないものである。」といふ保險運動の第五の根本思想に就いて述べやう。

一、慈善的施設及び團體が適當なる解決策を講じ得る確證がない

慈善的醫療幷びに救濟の施設または組織は、假令その擴張は大ひに希望すべきであるとしても、勞働者の疾病より生ずる各種の問題に對して、適當なる解決策を講ずるものであることを期待することは出來ない。そうしてその障碍の重要なるもの、一つには、彼等が斷えず闘はなくてはならぬ財政上の困難といふことがある。一九〇二年に於いて二十個の New York 市の大病院は、年々四十三萬二千弗の缺損を生ずることが指摘せられた。市の支給額はこれ等の施設によつてなされた費用の半額にも達しない。さうして市の財政狀態は、それ以上の增額を希望することが出來ない程、貧弱なものであつた。（Frank Tucker, "The Finantial Burden of New York's Hospitals,"）一九一五年には財政狀態は、一層不滿足なものであつた。五つの最大の病院中の四つまでが、一九一五年九月三十日に終る